

# 家族が教えてくれた「小さな親切」のカタチ

作文コンクール・はがきキャンペーンには、家族をテーマにした作品が毎年たくさん届きます。家の中には、様々な思いやりのカタチがあり、家族を想う気持ちは「小さな親切」の原点である、と改めて気づかされます。

今年度の作文コンクールは「小さな親切」に加えて、「わたしの家の親切」をテーマに追加。過去の両コンクール入賞・入選作品の中から「家族」にまつわるエピソードを紹介しますので、身近な人との関わりや日々の暮らしの中にある親切について、ぜひ考えてみてください。

筆者の学年及び年齢は受賞当時。  
作品は一部抜粋。



## 「よびすて」は兄弟げんかのせいで

千葉県鎌ヶ谷小学校4年 島崎陽悠

ぼくには2才年下の弟がいます。ぼくたちは、どうしてもすぐにけんかをしてしまいます。いつものように弟が、ぼくのことを「よびすて」にしたときに、おばあちゃんが言いました。

「お兄ちゃんのことをよびすてにするのは、おばあちゃんいやな気持ちになるから、やめようね。」

ぼくは、弟からよびすてにされてもなんとも思っていないんですけど、でも、おじいちゃんやおばあちゃんをいやな気持ちにさせてしまうのは、よくないと思い、ぼくは弟に「くん」付けでよんでもらうようにお願いしました。お母さんは、

「すぐにけんかをして、言葉づかいが悪くなるのは、相手を大事にする気持ちが足りないからだよ。家族だからといって、あまえてきずつけてはいけないよ。」と言いました。

ぼくも弟をそんちようするために、「くん」付けでよぶことにしました。はじめは、はにかしい気持ちもあったし、ついよびすてでよんでしまうこともありましたが、

でも、だんだんおたがいなれてきたように思います。

けんかになりそうなきでも、やさしい気持ちで名前をよぼうとすると、おこる前に少し落ち着いて考えられるようになります。弟がぼくの名前をやさしくよんでくれると、生意気だと思ふことが減って、心が温かくなりました。

ぼくは今、小学校の友達を親しみを持って、よびすてでよんでいます。でも、もしかしたら、いやだと思っている人がいるかもしれない。本当はちがうよび方でよばれたいかもしれない。

弟との関係を通じて、そんなことを想うようになります。ぼくは、少しずつよびすてをやめていこうと思いましたが、もっとやさしい気持ちが伝わるかもしれないし、やさしい気持ちが返ってくると思うのです。

それが、ぼくが考える「小さな親切」であり、大きな第一歩です。

第49回(2024年度)作文コンクール優秀賞



## 母は幸せです

栃木県 清川典子(77)

やさしい子どもたちに感謝

夫は12年前、末期の癌で他界しました。私は、それ以来独り暮らしを続けています。今年のお盆に帰省した息子が、

「お袋、電気料金を気にしないで、エアコンかけて涼しく生活するんだよ」と、支払い口座を変更してくれました。「ありがとう」と言おうとしましたが、何だか涙で言葉になりませんでした。

ふっと、子どもたちが幼かった頃が蘇ってきました。仕事から帰った私は、高熱で倒れこむように床に就き、うとうととしていました。急に額に冷たいものを感じ、ハッと目を開きました。息子が、水を入れたポリ袋をぎゅっと握りしめて、私の額に当てて冷やしてくれていました。

息子は当時小学3年生、娘は幼稚園生、二人とも真剣でした。あの時も、涙でくしゃくしゃになりました。

本当に、母は幸せです。ありがとうね。

第40回(2024年度)はがきキャンペーン入選

## 父のお土産

鹿兒島県 喜界中学校3年 小光

イマドキの洋服が教えてくれた

今回も父は嬉しそうに、私にお土産を手渡してくれた。5年前から単身赴任している父。会いに帰ってくるときには、いつも家族へのお土産を忘れない。最近の流行りにうとい私へのお土産は、イマドキな洋服。いつも丁寧に着替えてくれる。

お土産の服は、いつも同じ店の「店員さん」に選んでもらっている。毎回すてきな服を選んでくれるなあ、と嬉しくなって急いで着替えた。父は、

「似合っているね。サイズも大丈夫そうだよ」と嬉しそうに笑った。父の仕事はとても忙しい。家事と仕事を両立させながら、5年間も一人で頑張っている。そんな父にとって、お土産を買うことは、ふだんいっしょにいられない私たちへの愛情表現なのだと思う。

店員さんは父の気持ちを理解してくれて、父が服を探すのを一生懸命に手伝ってくれているのかもしれない。丁寧なラッピングを見るだけで、店員さんの優しさが伝わってくる。心が込められていると、知ら

ない相手はまだ思いが伝わるのだと実感した。人は関わり合って生きている。人との関わりを明るく、楽しくするために「親切」は必要なのだ。親切とは、誰かのために心を込めることだと私は思う。心を込めれば自然と、自分が相手のために何ができるかを考えられる。一人ひとりが小さな気づきができるのなら、優しい世の中になるのではないだろうか。

私が生きているのは小さな社会だけでなく、店員さんのように親切な人がたくさんいる。私にできることは周りの人に感謝すること、そして、自分のすべきことにも心を込めること。それが自然にできるようなりたい。将来社会に貢献できるように心の優しい大人になるために。

「小さな親切は、実は大きな親切なんですよ。」

担任の先生の言葉が心に響いた。

第47回(2022年度)作文コンクール特別優秀賞



あなたの温かなエピソードをお寄せください

### 第51回「小さな親切」作文コンクール

テーマ: 小さな親切/わたしの家の親切

応募資格: 小学生・中学生(小中学生と同じ年齢のものを含む)

応募時数: 1,200字以内(題名、氏名等は含まず)

締め切り: 2026年9月25日(金)必着

高校生以上はこちら

### 第42回 はがきキャンペーン(こころのエッセイコンテスト)

テーマ: あのとときはありがとう

応募資格: 高校生以上(高校生と同じ年齢を含む)

応募時数: 600字以内

締め切り: 2026年9月3日(木)必着

両コンクールの応募要項を確認できます▶

